

Gary S. Becker, *A Treatise on the Family*,

Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1981, 288pp.

経済学は家族の分析を新天地として開拓することに成功するであろうか。本書は経済学を研究する人がその研究対象として家族の行動を扱う場合にどのように対処していけばよいかを示す一つの手本である。その際、家族の行動を理解する一つの手段として経済学理論をいかに応用するかが鍵となっている。言い換えれば、経済学理論を駆使した筋書を創作し、家族の行動を再解釈する試みを繰り返しながら適切なものを選別する過程が重要なのである。同様に重要なことは、観測可能な事象からなる実証可能な筋書を選別し、計量分析の道を開くことである。

本書の内容は中級程度の経済学を勉強した経験のある人には容易に理解できるものであり、全体をつうじて個人の最適化行動と安定した選好構造ならびに潜在市場と顕在市場における均衡が仮定されている。各章を要約すると以下ようになる。

第一章「単身者世帯」では家計内生産関数、人的資本の理論と時間配分の分析が簡潔に整理されている。第二章「世帯および家族における分業」では労働の生産性に関する比較優位と規模の経済—不経済とを柱とする議論が展開されている。第三章「結婚市場における複婚と単婚」では婚姻状態における生産および分配と独身生活との費用便益比較、男女未婚人口の等質性に応じた結婚市場における需要と供給の導出、生産効率指数を含む結婚生産関数の分析がおこなわれ、Cobb-Douglas関数を用いた例がしめされている。第四章「結婚市場における配偶者選択」では最適割当ての理論を背景として夫婦間の代替および補完と最適組合わせの理論を展開している。

第五章「子供の需要」では、子供を耐久消費財として家計内生産関数のなかであつまい、非線型予算制約下における弾力性の理論分析をおこなっている。第六章「家族的背景と子供に与えられる機会」では二世世代重複モデルを用いて子世代への人的資本投資の理論が展開され、所得導出関数と資産導出関数が分析されている。子供のもつ能力の相違によって親の投資配分が変化することがしめされている。第七章「所得の不平等分布と世代の移行による所得階層間の移動性」では市場における運と親から受け継ぐ運が独立な確率変数と仮定されて所得分布の変化係数が求められ、所得再分配政策、経済成長、子供数、同類婚との関係が分析されている。さらに、世代間にみられる変化は親からの相続と投資によって規定されることが示されている。

第八章「利他主義と家族」では利他主義的効用関数が定義され、家族成員間の分配および親の行動の分析が行われている。その際、利他主義の親の存在が子供の行動を左右することが示されている。第九章「人類以外の種の家族」では遺伝的適応度をしめす目的関数が子世代の量と質で規定され、両性の貢献度の差異により配偶形態の差を説明する理論が示されている。第十章「不完全な情報、結婚、および離婚」では結婚相手に関する情報の不完全性および将来の不確実性の問題が離婚との関連で叙述されている。第十一章「家族の進化」では経済成長と家族制度の変化の関係をあとづける試みがなされている。不確実性と限定情報のもとにおかれた伝統的家族の最適化行動が親族集団、家督相続、敬老、世襲、家本位の結婚などを親族保険として機能させていたと考えられている。経済成長の過程で親族保険が市場保険に代替され、より多くの人的資本投資と女性の稼得能力の上昇が家族の進化をもたらしたものと説明されている。

本書は新家政学派の金字塔であるのみならず新制度学派の流れにも貢献するものである。限定された家族の側面にはあるが、経済学の理論を適用したことに適切な評価が与えられるべきであると考え。著者自ら望んでいるように、学際的な雰囲気のもとで各分野における家族の研究をさらに深めることが読者に与えられた課題である。

(松下敬一郎)